

## マルギット・シュライナー氏の朗読会を聞いて

山本浩司

マルギット・シュライナー氏の朗読会(司会:シャイフェレ編集長)は、本会主催で、03年11月13日(木)午後3時から行なわれた。学部学生が大挙して押しかけ、会場の早大文学部第五会議室を埋め尽くすほどの盛会であった。

公式ホームページ(<http://www.margitschreiner.com/>)によれば、シュライナー氏は1953年オーストリアのリンツに生まれ、ザルツブルク大学でドイツ文学と心理学を修めた。77年から80年にかけて東京に滞在し、それをきっかけに書くことに目覚めたらしい。東京の大学のドイツ語教師が出てくる作品もある。作家としてキャリアは83年にはじまるそうだが、一般の注目を浴びるようになったのは、惚けた父との別離を描く『裸の父たち』(*Nackte Väter* 1997)、離婚をテーマにした『家、女、セックス。』(*Haus, Frauen, Sex.* 2001)、母との死別にはじまる『愛とは』(*Heißt lieben* 2003)の「別離三部作」あたりかららしいので、かなり遅咲きだといっても失礼にはあたるまい。今回の朗読会では、このうち『家、女、セックス。』と『愛とは』の一部、それに加えて90年に発表された短編集『私の初めての黒ん坊』(*Mein erster Neger*)から表題作が朗読された。

彼女の書く文章は比較的平易で、肩ひじ張らずに読めるのではないかと思う。しかし具体例も示さずに作家の文体について語ったところでさして意味はあるまい。一方でここは綿密な作家論・作品論を展開する場でもない。そこで、朗読されたテキストのなかでは唯一それ自体で完結した短編「私の初めての黒ん坊」を拙いながら全訳することで、彼女の仕事の一端を紹介し、朗読会報告の役目を果たすことにしたい。

\*

### 私の初めての黒ん坊

初めての黒ん坊と私が知り合ったのはイタリアのカオルレでのことだった。

「黒ん坊じゃなくて、まっくろに日焼けしたバカンス客だったわ」と母。父もそう言う。子供のときカオルレでわたしはとても日焼けしたバカンス客を黒ん坊と勘違いしたと、両親は言うのだ、そのせいでとても気まずい思いをさせられた、なかでも私が浜辺のまんなかで立ち止まり、とても日焼けしたバカンス客を指さして、「見てよ、お母ちゃん、黒ん坊よ」と叫んだのだから、と。

そうだったなんて信じられない。

記憶しているかぎり、母に「お母ちゃん」などと言ったことなどない、いつも「ママ」だった。私には「ママ」のほうが「お母ちゃん」よりもドライな感じがしていたから。「お母ちゃん」とい

う言い方は子供の頃から馴れ馴れしすぎる感じがして、いつも母に「お母ちゃん」とは言わないようにしていたのだから。だけど母自身はそれにしょっちゅう文句を言って、「お母ちゃん」と言うように要求したが、私はまさにそれだけは、覚えているかぎり、いつも避けていたのだ。そんな言葉、口にするくらいなら、何も言わないほうが良かった。

だから私が浜辺で「見て、お母ちゃん、黒ん坊よ」と叫んだ、それも人さし指を伸ばして、なんてちょっと想像できないのだ。だって子供の頃の私は一目につく動作をしないようにずっと注意していたのだから。当時のアルバムが証拠だ。どの写真を見ても、私はしゃちこぼって両腕をびったり体にくっつけてつっ立っているのだ。腕を伸ばしたり、足を広げたり、首を伸ばしたりしている写真なんか一枚もない。私はいつも直立不動の姿勢だった。それは完全に私自身の記憶とも符合する。思い出のなかで私はいつも目立つことを避けてきた。だから浜辺のまんなかで叫んだなんてことは絶対にありえない。

まえまえから思っているのだけど、どの親も自分の子供たちについてあるイメージを作り上げていて、後で思い出すのはいつもそのイメージなのだ。子供たち自身のことなど、彼らは何も知らないのだ。

だけど、父も母も繰り返し、何年も前からずっと、私がカオルレで見たのが黒ん坊じゃなく、とても日焼けしたバカンス客だったと強調するものだから、そして私もどうして黒ん坊がわざわざカオルレのホテル「ペラビスタ」までやってきたのかちゃんと説明できないので、本当に子どもの頃の私が褐色に日焼けしたバカンス客を黒ん坊と取り違えたのではないか、と思いたくもなる。だけど、そんなことはどのみちどうだっていいことなんだ、私がああとき、あれは黒ん坊だと思ひ、したがって私の最初の黒ん坊経験をこの（なんだったら褐色に日焼けした）バカンス客としたのは確かなのだから。

初めて彼にあったのはホテルのエレベーターのなかだった。あの頃はエレベーターがまだもの珍しかった、半日私はエレベーターに乗って昇降を繰り返していた。朝は四五回、昼は二三回、夜も同じぐらい。ある朝、私はもう水着に着替え首にはスイミングバッグをかけ、今度であがるのがちょうど三回目だから、そしたらいいかげん降りて朝食に行こうとしていた。そのとき突然黒ん坊が乗り込んできたのだ。彼も水着姿だった。首に緑のバスタオルをかけていた。髪は短く縮れていた。目は褐色、眼球だけは褐色の顔のなかで白く輝いていた。私はとても恐くなってエレベーターの片隅に小さくなった。黒ん坊はにやついた。それからエレベーターを降りていった。私は恐怖のあまりもう一回だけ降りて昇ることにし、そして最後にとうとう下に降りていくことにした。

このイタリアでの休暇には、いつもと同じように、伯母フィーニも一緒だった。伯母は当時もう七〇歳を超えていたが、とても元気だった。その彼女ももう死んでしまった。生前彼女は両親に何度か遺書のコピーを送ってきた。そこにはアクセサリーをぜんぶ母に贈ると書いてあった。のちに伯母が死んだとき、アクセサリーが結局は母に遺贈されてなかったことが明らかになった。母はそのときとてもがっかりしていた。

フィーニ伯母はアクセサリーをととてもたくさん持っていたので、イタリア滞在中ずっと昼も夜もホテルの金庫に預けておかなくちゃならなかった。ただ晩のあいだだけ着用した。彼女が身につけると、宝石はとても強い輝きを放った。ブリリアント形のダイヤをちりばめパールの鎖のつい

たルビーの指輪を持っていた。それらはレストランのシャンテリアの光の中できらっと光るのだった。エメラルドの鎖ももっていた。ゴールド、シルバー、プラチナの腕輪も。

フィーニ伯母にゴールドの腕輪をもらったことがある。だけど身につけることはまずない。部屋のどこかに置いてあるはずだけど。換金しようとしたこともあるが、宝石商が言うには、たいした金にはならないらしい。

結局母が伯母の形見にもらったのは、ダイヤのブローチと、ぬかるみから抜け出せなくなったジプシーの車を描いた油絵だけだった。フィーニ伯母はカオルレの浜辺のプロムナードでこの絵を買って求め、いずれ価値の出る芸術作品だとずっと信じていた。両親もそう信じていた。というのも彼らの考えによれば、宝石と芸術は最高の投資先であって、価値が出る前に誰かがどこかでそのような芸術作品を発見しないことにははじまらないのだから。

朝食のとき黒ん坊は食堂の反対のすみに座った。鏡に映る彼を観察できた。一人きりで席についていた。彼だけが一人きりだった。他はみな家族連れだった。朝食にでた大きな白いゼンメルをほじくりながら、私は一人席で食べる黒ん坊の食べ方を観察した。でも彼は他のみんなが食べるのと同じものを食べていた。

休暇の最初の一週間は浜辺で彼を見かけることはなかった。もっとも、他にすることがいっぱいあったので、特に彼に注意していたわけでもなかった。砂の城を作ったり、泳いだり、ボートに乗ったり、ポッチャをしたり、ミニゴルフ、トランプ、それからそれから。

ポッチャは日に二回やった。午前一回、午後一回。メンバーは父、母、フィーニ伯母、それにここで知り合った人たち（両親とフィーニ伯母は毎回誰かしらなじみを作るのだ）、そして私だ。私が初めての黒ん坊と知り合った年のなじみはシュトゥットガルトの裁判官だった。ラウホという名前で、ずっと泳ぎが得意なようにふるまっていた。実際には、浅瀬で足をつき腕で泳ぎのまねをするだけだったのに。伯母はラウホ氏を「温泉場の恋人」と呼んでいた。どうしてだかは分からなかった。ポッチャに勝ったら、賞品はアイスだった。アイス代はいつも父が出した。彼自身が勝とうが負けようが同じだった。みんなにアイスをおごってくれることもあった。午後も私たちはポッチャをした。お昼ごはんの前にシャワーを浴び着替えた。最近のカオルレやミニやイエゾロがどうなっているかは知らない。いまじゃバカンス客は水着のままお昼を食べているのかもしれない。でも当時はそんなこと、ありえなかった。昼食も夕食も例外なく着替えてから行くのだった。黒ん坊もそうだった。昼には黒ん坊はブルージーンズと派手なシャツを着ていた。そのことはよく覚えている、だってあそこブルージーンズをはいている人なんてまだ珍しかったもの。ホテルのレストランの昼食にブルージーンズをはいている人がいると、人目をひいた。他の男たちは昼食には折り目のしっかりついた白いズボンをはいていた。白いシャツと。

昼食と夕食にはそれぞれ三品がでた。前菜はミネストローネとスパゲッティのどちらかを選べ、主菜はいつもなにかしら肉料理だったが、それは薄くてかたかったので、ちっともおいしくなかった。母が作る肉料理はいつもふ厚くてとても柔らかかった。とろけるくらい。母は肉がかたすぎやしないか心配でしょうがなかったのだ。だから彼女は圧力釜を使い、いつもほとんどとろけさせるのだった。だけど私はとろけて肉の味のしないのに慣れちゃっていたので、イタリアの肉料理はちっともおいしいと思えなかった。

デザートはアイスかチーズか果物だった。私はいつもアイスを食べた。昼も夜も。かならずレモンアイスだった。

晩ご飯を食べると、私たちはカオルレの町を散策したり、途中でまたアイスを食べたりした。フィーニ叔母はそのとき宝石を全部身につけていた。たぶんそのせいだ。私は彼女は大金持ちなんだと思ひこんだ。

でも彼女の家はお湯も出なければトイレも共同だったという。イタリアで休暇を過ごしすぎて何年かして、母は父と初めて叔母の家を訪ねた。帰宅してから母がそう話してくれたのだ。両親はそれを電撃訪問と呼んだ、というのも事前に連絡もしないでカッセルの家を訪ねたからだ。「目の開かれる思いだったわ」と帰り道で母は言った、「テーブルクロスさえないのよ。」たしか「みじめ」って言葉さえ使ったと思う。母がフィーニ伯母の二重生活について語ったのをまだちゃんと覚えているのは、そのとき大きすぎたと思ったからだ。

でも、私がまだ両親とフィーニ伯母と一緒にカオルレ、リミニ、イエゾロでバカンスを過ごしていた頃には、私たちはそんなことなどちっとも知らなかった。私たちは伯母が金持ちでとても品がいいと思っていた。子供の私にとっても品がよく思えたのは、日光浴のときに伯母が鼻カバーをしていたことだった。

彼女の鼻は日に焼けるとすぐに赤くなって、それから皮がむけてしまうのだった。鼻カバーはプラスチック製で透明だった。いちど伯母は鼻カバーをはずし忘れたまま夕食に現れたことがあった。彼女が黒ん坊の席のそばを通りかかると、私は鏡で確認したのだけど、黒ん坊が鼻を指さした。その動作を伯母は完全に誤解した。顔中真っ赤にしてすごい剣幕でホテルレストランの私たちの席までやってきたので、鼻カバーをはずすのを忘れていと教えてあげるまでにひどく時間がかかる始末だった。フィーニ伯母はそのあと外し忘れた鼻カバーのことで大笑いした。しかし黒ん坊が恥知らずなやつだということについては考えを決して改めなかった。

彼が私に初めてウィンクしてきたのも、鏡のなかでのことだった。レモンアイスを食べてるときのことだ。黒ん坊も毎日昼食と夕食の際にデザートとしてアイスを食べていた。私たちはちょうどアイスを食べていた。そうしながら彼を観察していると、彼がウィンクしてきたのだ。気づかないふりをしてみたものの、頭の中がすっかり熱くなるのを感じた。私はとてもはにかみやの子供だったから。朝食のまえ、昼食や夕食のまえに、私はよく両親が部屋から出てくるまでずっとエレベータを降りようとしなかった、というのは家族と一緒に隣の席に座っているドイツ人の男の子が声をかけてくるんじゃないかと心配でしようがなかったからなのだ。

子供の頃の私は他の子供たちと遊ぼうとしなかった。それを気にしていた母によく語って聞かされたものだ。どんなふうにも母が三歳の私のためにイエゾロの浜辺で女の子の友達を捜してあげたことか、はにかんでばかりいて、私ひとりではそんなことできやしなかったんだから。私と手をつないで子供から子供へと渡り歩き、手当たり次第に私の友達になってくれるかどうか尋ねたものだった、と。母がそうやってひとり女の子を見つけ出してくれたのは確かなようだ。なぜなら一枚の写真が残っていて、そこではこの女の子と私が砂浜に並んで座り、つまんなさそうに穴を掘っているのが写っているのだから。

母が黒ん坊を好きじゃないのはうすうすわかってきた。「変よね、あの人たった一人でバカンス

だなんて」と寝椅子に寝ころがる父に言ったし、フィーニ伯母には、「あの人どこか変だわ」と言っていた。私には何も言わなかった。ただ、水着をちゃんと引き上げなさい、と口うるさかった。というのも、吊り紐がゆるくなっていたし、胸のあたりは完全にべちゃんこだったので、私の水着はすぐおなかまでずりおちてしまうからだった。

初めての黒ん坊と知り合ったとき、私は十歳だった。私たちがカオルレに滞在してまる一週間もたった頃、彼が初めてアイスをおごってくれた。レモンアイスだった。私はちょうどポッチャに負けたところだった。父が勝った。でも、どういう理由だったかはもう思い出せないが、このときは誰にもアイスを買ってくれなかった。自分が勝ったのに、自分にさえ買わなかった。その直前に父が着たがらないのに、母のお気に入りのズボンか何かでひともめあったのだろうと思う。いずれにしろみんながみんな不機嫌だった。フィーニ伯母は絶え間なく舌打ちしていた。それはたいていすぐ後にあからさまな争いが起きることを示していた。しかも経験からしてちょうどバカンスに入って一週間後のタイミングで。というわけで私は一人海岸にそってアイススタンドのあるバーまでぶらぶら歩いていった。と、ホテルレストランで隣に座るドイツ人の男の子の姿が見えたので、私は脱衣所の陰に隠れた。そこで私はちょうどなかから出てきた黒ん坊に出会ったのだ。そして彼は私に最初のレモンアイスをごちそうしてくれた。

それからは毎日彼と会った。秘かに。ただ一度だけちょうどアイスと一緒に食べているところを母に見つかった。母はすぐに私を呼びつけた。そして、これからは知らないおじさんからアイスを食べさせてもらったりはしないと誓いなさい、と言った。私は誓った。その後も何度も両親に誓ったが、その誓いの言葉を守ったことなどない。嘘の誓いだっていくらでもした。彼らの信頼を次々に裏切った。両親の教育方針はつまりは信頼に基づくものだったから。

黒ん坊は、私がきれいだと言った。「ベラ」と彼はイタリア語で言った。そういつてくれたのは生まれて彼が初めてだった。そんなこと女の人にだって言われたことはなかった。そもそも誰もそのときまで私がきれいだなんて言ってくれなかった。私はまた特にきれいだったわけじゃない、と思う。写真があるのだ。やせっぽちでおかっぱ頭だった。まるで誰かが鍋を私の頭にのせて、それに沿って髪を切ったみたいだった。私の着ていた服はどれも似合わなかった。実際そうであるよりもっとやせてのっぽにみえるような服ばかり着ていたのだ。黒ん坊は特に私の目がきれいだと言った。それは特に奇妙だとは思わなかった。というのも黒ん坊はみな褐色の目なのに、自分は青い目をしていることを知っていたからだ。子供の頃の私はコバルトブルーの目をしていて。写真から推測できるかぎり、十三歳まではコバルトブルーの目だったのだ。その後、明るさが失せたのだ。黒ん坊は空のように青い私の目をきれいだといい、さらに髪もほめた。私の髪はイタリアで一番見栄えがするのかもしれない。というのも太陽で色あせ、塩と砂で乾ききり、風でぐしゃぐしゃになってたから。とにかくイタリア以外ではきれいじゃなかった。母は横分けにして、髪留めでおでこから髪を垂らした、そのため髪の束がいくつか頭にくっついているように見えた。おかげで頭はとても小さく見えた。少なくとも写真ではそうだ。

もう少しで黒ん坊に新しい水着を買ってもらえるところだった。私たちは例の脱衣所のところで会った（ついでに言えば私たちは待ち合わせたことなどなく、日に一度脱衣所までぶらついて、そこで彼に会うか、彼がいなければ、しばらく待つのだ、時々彼のほうが待つこともあった、と

思う)、そのとき水着屋が通りかかったのだ。きらきら光る水着ばかり売っていた。それはまだ覚えていた。金糸が縫い込んであったのか、それともスパンコールが貼りつけてあったのか、それに水着がどんな素材でできていたのか、ってことはもう覚えていない。じっと見ると、ほとんど目をあけてられないほど、水着が日の光を反射していたことだけは覚えている。水着の前面には玉虫色に輝く虎やシマウマや象が縫いつけられているか、貼りつけてあった。こんな水着が自分のものになればどんなにうれしかったろう。黒ん坊はすぐにひとつ買ってあげよう、と言った。しかしもちろん、新しい水着を着て両親のもとに帰れるわけないとわかっていた。そんなことをすれば、すぐに取り上げられ、それ以後は一瞬たりとも目を離してはくれなくなるだろう。だから私は水着を断るしかなかった。後で私は脱衣所の後ろに回って泣きわめいた。

黒ん坊はブルーノという名前だった。私たちは一緒に砂浜を歩き回り貝殻を集めた。ボートに乗ったりもした。一度は浜辺で並んで写真を撮ってもらったこともある。そのために私たちはわざわざそこに置いてあったヨットによじ登り、それから写真屋がカメラにおさめてくれた。

私たちはバドミントンもしたし、ミニゴルフもサッカーもした。ただ泳ぐことだけは黒ん坊はやらなかった。

フィーニ伯母は私のことを心配した。「私だったら子供をいつも一人であちこち走り回らせたりしないだろうよ」としょっちゅう両親に言っていた。「どうしてあの子はここの寝椅子に寝そべっていることができないんだろうね、ひとりであちこち回ってばかりいて。」だけど母は幸いにして、私の父の従姉妹であるフィーニ伯母のことを教育に関しては古くさい考えの持ち主だと思っていた。だから伯母が私の心配をしても、ただほほ笑むばかりで、浜辺を散歩するほうがどのみち一日中寝椅子でただだらすごすよりも健康的ですよ、と言った。根本的に母と伯母は憎みあっていた。でも二人ともそれを認めようとはしなかったのだ。伯母が母の背後で頭を振っているのをしょっちゅうわたしは見たし、母が伯母について父に語ったことも全部耳に入ってきた。

でも私は子供の頃伯母がとても好きだった。カオルレについたとき、彼女はたいていすぐに土地の最高のジェラテリアに私を招待してくれた。そこの椅子はリンツのニーメッツみたいに、赤いビロード張りだった。壁には燭台が掛かっていて、それはどれもクリスタル製だった。

そのうえ伯母がいつもよく笑うのが私は好きだった。例えば、鼻カバーをとるのを忘れていた時みたいに。とくに夕食に水で割った赤ワインを二杯飲んだりすると、彼女は言い寄る男たちのことをしゃべった。例えば、少しばかり沖に泳ぎでることで、温泉場の恋人たちを振り切ることにまんまと成功したとか。そういうとき彼女は特に大きな声で笑った。すると顔中涙だらけになった。鏡のなかで黒ん坊がいつも一緒になって笑うのが見えた。フィーニ伯母はあのところもう七二歳だったのだが。

やがて私も伯母がもう好きじゃなくなった。私が大きくなるにつれて、伯母はますます私に口出しするようになった。長い髪とズボンをあまり品がないと言い立てるので、口論ばかりするようになった。私たちが一緒にバカンスを過ごした最後のほうはいつもそうだった。その後、両親は、アルムタールのグリューナウに別荘を借りたので、もうイタリアに出かけることはなくなった。海よりも山のほうを好むようになってきた父はカオルレよりもそのほうが気に入っていた。伯母もこの別荘に私たちを訪ねようとはしなかった。彼女が言うには、山はもう彼女にはきつい、登山す

るには年をとりすぎた。彼女にとっても海は、あまりにも汚くて、もうとっくに気に入らないものになっていたが、それはまた別問題だった。

だけど、私が最初の黒ん坊と知り合ったあのころのカオルレでは、私たちみんなが海辺をとっても気に入っていた。私たちが浜辺を歩きながら貝殻を集めていたとき、私は黒ん坊に故郷の様子を尋ねた。彼は、そこには高い山がある、雪をいただいた山が、と言った。野生の象もいるの、ときくと、彼は笑った。しかし私がまじめに聞いているのを見て取ると、それからただほえみ砂浜に腰を下ろし、とても奇妙な様子で海を眺めやった。両手で砂を掘り、指の間から砂を流れ落とした、ずっと。「大きな象」と彼はしばらくして言った、「大きな耳、太い足。」それからまた海をじっと眺めた。しばらくして話しはじめた。ちなみにブロークンなドイツ語で。

彼は、東にインド洋、中央に高い雪山、北に湖のある大きな国について語った。砂金の浮かぶ川について。黒い火成岩の穴のあいた軽石について、それらを縫うようにして小川がクリスタルのように透明な池に流れ込んでいる。彼は、乾ききった河床の白く青ざめた象の骨について語った。電流の通った柵について。フラミンゴについて。二月の決まった日に生まれる何万頭もの白ひげヌーの子供たちについて。有刺鉄線、監視塔、鉄格子小屋について。彼は脚の長いすごい美男子について語った。どっかの砂漠の砂のなかにあるという鳩の卵大のダイヤモンドについて。古いカテドラルの天蓋の下にいるような匂いについて語った。光について。砂漠と山を通る送電線について語った。原始の森を走る鉄道について語った。(ここで彼はもう一度「古いカテドラルの匂い」と言った)。また何度も何度も象の骨について語った。語りながら彼は海を見ていた。指の間から砂が流れ落ちていった。

ホテルの前で彼が海から引き上げられたとき、彼は服をちゃんと着ていた。にもかかわらず当時はみんなが、泳いでいるときに溺れたんだと言った。彼は一枚の写真以外には何も身につけていなかったという。ただしそこには彼しか写っていないかった。明らかに写真に写っていたもう一人の人物ははさみできれいに切り取られていたらしい。

私の記憶はまさにこうであって、そうとしか考えられない。でも両親が言うには、まるっきりそうじゃなかった。あのとき溺死した漁師がいたけれど、それはホテルの前じゃなく、砂浜を二三キロ離れたところで海からつり上げられたのだった。

私が当時黒ん坊だと思った日焼けしたバカンス客は急に旅立ったのであって、黒ん坊であるはずがない、というのだ。

しかしいま私は、この物語を書きしるした後では、かつてないほど確信している。あれは黒ん坊だったとしか考えられない、と。

\*

「私の初めての黒ん坊」と聞くと、まるで黒人グルービーがみずからの華麗な性遍歴を振り返って告白しているみたいだが、ごらんの通り、少女の頃の家族旅行を大人になってから思い出しながら物語るという体裁をとった小説である。

ところで、この短編集には「アフリカの思い出」という副題がつけられている。作者自身アフリカに行ったことはなかったと朗読会の場で明言していたように、それは必ずしも現実のアフリカではなく、その喚起するイメージが問題なのだろう。表題作でも「黒ん坊」が故国の風景について語るが、そのアフリカは「野生」と「独裁」のキッチュなイメージを貼りあわせたものにすぎないように見える。もっとも、このアフリカとの関係が希薄な小説が、表題作として「アフリカの思い出」の中核に位置しうるのは、「記憶」と「物語」の共犯関係がそこで問われているからだろう。よく言われることだが、実際には体験もしていない「記憶の原風景」が後から作り上げられることがある。ちょうど精神科医の示唆によって、患者がいつのまにか自分でも性的に虐待されたという原体験を信じ込んでしまうように。いや、「原風景」とはすべからく後知恵によって「捏造」されたものではないのか。シュライナー氏の物語はまさにこの点をついている。そこに顕著なのは、忘れられた「真実」を探究していこうという姿勢よりも、「原風景」など虚構にすぎないと前提した上で、それを「物語」によって捏造していくしかないのだ、との覚悟ではないだろうか。だからこの小説では最終的に「真相」が明らかになることはない。「私」の記憶の物語と周囲の大人たちの証言との齟齬は最後の最後まで解消されず、どちらが真実であるのか、結論は持ち越される。この虚実のあわいに読者を宙ぶらりにするところに、この作家の魅力がありそうだ（もっとも、最新作『愛とは』では、少なくとも朗読された断章だけを読む限り、登場人物の輪郭までもがぼやけてしまい、足の踏み場がごとごとく底なしに沈んでいくような不確かさのなかに読者が放置されているような印象がある。そういうのを好む向きもあるのだろうが、どうもやり過ぎではないかというのが私の率直な感想だ）。

他方で、想起の作業が「幼年期」の終わりを決定づけていくという点に、この小説の魅力がある。しかもこの個人の次元における「幼年期」は、古き良きヨーロッパ、没落した「昨日の世界」に通じているようだ。この二重の喪失感がこの小品を忘れがたいものになっている。少女は、「黒ん坊」との出会いをきっかけに、父母や伯母に対して秘密をもつようになり、ついには批判的まなざしを獲得して大人になっていく。一方、小説の舞台カオルレは、どこかしら映画『ヴェニスに死す』で描かれたような世紀転換期のリゾートの面影を残している。海水浴場なのに、ジーンズなどもってのほかで白の正装に身を固めるのが当たり前の世界。そこでポッチャ（ポーリング）や水遊びに興じる幸福な家族。こうした牧歌的な海浜の風景は、ひと夏の間だけ伯母が資産家を演じきったように、実はそのうちに大きな危機をはらんでいた。いわば老朽化して生じたひび割れを厚化粧によって隠し通すことで維持される幻想にすぎなかったのだ。そしてその厚化粧は、「黒ん坊」というストレンジャーの出現にともなって、縦横に亀裂が走り、ついにはこなごなに崩落する。

いや、しつこく鏡を介して描かれる「黒ん坊」の存在感の希薄さを思えば、むしろこう言うべきかも知れない。幸福の斜陽を予感した少女が、それを決定的にするためにストレンジャーの幻影を招き寄せたのだ、と。もっと言えば、成人した少女が語り手として、このひと夏の体験を大人への分岐点として特権化するために思い出に手を加えたときえ考えられる。彼女の物語が要請するのは、出来事を特権化するための舞台装置である。おそら



くは彼女が出会った男が黒人だろうが日焼けしたバカンス客だろうが、本当はどうでもいい問題なのだ。でも語り手にとっては、日常を突き破るような一回限りの何かが不可欠だった。だから彼女の記憶の物語は異邦人としての「黒ん坊」、鏡像としての他者を捏造したのだ（両者の鏡像関係は、「黒ん坊」の消滅にもなって現れる「私」の目の色の変化にも象徴されているだろう）。これによって、古い世界が何の変化もなく持続していると考えられる両親の見方（「まっくらに日焼けしたバカンス客」）に対して、語り手はこのひと夏の体験に異物性（「黒ん坊」）を付与し、墨汁の一滴が垂れ落ちてしまった以上は、もはや白一色の無垢なる世界は維持できないことを確認していくのだ。その意味では、この小説は短いながらも「別離」という主題を準備するシュライナー氏の原点といってもよさそうだ。

\*

朗読に引き続いて質疑応答が行なわれた。実は当日の録音がうまく行かなかったので、メモもとらなかった報告者の実に曖昧な記憶に頼らざるをえなかった。直接質問者に問い合わせることもしたが、かなり時間が経過したせいで、どなたの記憶もあやふやになっており、まさに小説の語り手同様、確信がもてないのであった。それでもがんばって思い出していただいた、都立大学の池谷尚美さんをはじめとする方々にこの場を借りて感謝したい。にもかかわらず、実際の質疑応答とのあいだに「ずれ」が生じているに違いない。その責任はいっさい報告者が負うのは言うまでもない。もっとも、恐ろしいもので、書いて活字になってしまえばいかにもそれが本当らしく見えてきて、それ以外にはありえなかった気がしてくるのも事実である。

問：『私の最初の黒ん坊』の主人公が10歳の女の子。『家、女、セックス。』の中でも、回想場面に10歳のときの思い出が出てくる。この年齢は何か特別な意味を持つのか？

答：特別な意味を持つと意識しているわけではない。しかし周囲の物事を鋭敏に感じたり、物事を観察したりするにはこれが限界の年齢だと思う。

問：『愛とは』について。散文と、詩が混ざっている文体になっているが、文体の統一性を損なうとは思わなかったのか？

答：統一させることを意識はしなかった。（自分が言いたいことを形にするためには）詩を織り交ぜながら書くことのほかに方法がなかった。

問：どうも最近のオーストリアの女性作家は変な題名をつけるのがはやっているみたいだ。ウィーンしか出てこない戯曲に『ニューヨーク、ニューヨーク』とつけたシュトレルヴィッツとか。あなたの短編小説『私の最初の黒ん坊』もポルノ小説みたいだし、『家、女、セックス。』は、つなげると「主婦のセックス」。昼下りの情事を思い浮かべる。題名のつけかたにどんな工夫をするのか。

答：挑発は考えている。出版社の意向もある。

問：「家、女、セックス。」の棄てられた男の嘆き節は、まるでバッハマンの「さまざまな

死に方」を意識し、そこで女性によって告発された「生の事例化・作品化」を逆転させたように読める。バウマンやイエリネクたち、先行する「フェミニスト」作家たちを意識はしているか？

答：あまり意識してはいない。「フェミニズム」とは関係ないところで創作している。先行作家たちに対するフェミニストなるレッテルもあとからつけられたものだと思う。

問：朗読した作品はどれも一人称形式ばかりだけど、自伝的な要素はあるのか？

答：あるかもしれない。その方が書きやすいのは確かだ。